HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|---|---|
| Title | 新渡戸稲造と基督友会（クエーカー） |
| Author(s) | 長尾, 輝彦 |
| Citation | 基督教學, 45, 1-9 |
| Issue Date | 2010-08-23 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/47476 |
| Type | journal article |
| File Information | SC45_001.pdf |

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

# 新渡戸稲造と基督友会（クエーカー）

長尾輝彦

## （一）ジュネーブでの退任記念講演

新渡戸稲造は一九二六年十二月六日に連盟事務局の任を終えるが、その一週間後の十二月十四日に、ジュネーブ大学で、「日本人が見たクエーカー」[1]という講演を行い、その中で自分は四〇年間クエーカーの信条に従って生きてきたと述べている。時期的に見て退任記念講演と言えるものであった。新渡戸は、日本政府の期待を担って連盟の要職についたが、ロンドンに拠点を持つクエーカー・コミュニティーもまた、期待をこめて新渡戸の活躍を見守っていた。それもそのはず、クエーカーの先人ウィリアム・ペンは、十七世紀末という早い段階で、連盟に似た国際組織の青写真を描いていた。新渡戸の語るところによると、その青写真は会議室の詳細な設計まで含んでいた。すべての国の代表が同じ権限で席に着かなくてはいけない。だからテーブルは上座も下座もないように、丸いテーブルにする。入り口があると奥が上座になるから、入り口は部屋の周囲にいくつも設置するというものであった。[2]人種差別反対と平和主義を二大原理として掲げるクエーカーにとって、世界平和と国際協調はまさに究極の目標だったのである。

一八四三年創刊で今日まで続いているクエーカーの週刊雑誌「ザ・フレンド」[3]は、連盟事務局がロンドンに仮設置された一九一九年から、新渡戸への密着取材を始めている（十一月七日号）。一九二〇年八月十二日から八月二〇日まで、ロンドンで世界大会「オール・フレンズ・カンファレンス」が開催されることになり、アメリカから来た代表団の中には新渡戸の義弟ジョゼフ・エルキントン（実際は新渡戸より三歳年上）もいた。彼は旅行中のけががもと

で、その大会の二ヶ月前の六月にロンドンで客死し、ウィリアム・ペンをはじめ多くのクエーカー教徒が眠っているジョーダン（バッキンガムシャー州）に埋葬された。「ザ・フレンド」誌七月二日号は彼の追悼文を載せている。またその世界大会で新渡戸が国際連盟への理解を呼びかける演説を行ったことも、「ザ・フレンド」は報じている（八月二〇日号）。連盟事務局がジュネーブに移って後、一九二一年には、新渡戸がオックスフォードで行った講演のダイジェストが、二ページにわたる写真入りの記事として掲載されている（十月二一日号）。一九二六年一月一日号には、新渡戸自らが寄稿した「国際連盟の基盤」という一ページ半の記事が掲載されている。そして一九三三年十月二七日号は、その月の十五日になくなった新渡戸稲造の追悼記事を載せている。その中に、「私たちにとってジュネーブを訪れることは、宗教的雰囲気と幅広い人間観と楽しい社交的な気分に満ちた家庭で歓待を受けることができるという喜びを意味するものだった」という追想が述べられている。新渡戸夫妻が借りていたレマン湖のほとりの邸宅は、キュリー夫人、ベルグソン、マレイ、アインシュタイン等を歓待し、また日本やアメリカの知人・友人をもてなしたことで知られているが、同時にクエーカーの人たちとの語らいの場にもなっていたことがわかる。同記事はさらに、一九二六年十二月のジュネーブ大学での退任記念講演に触れ、新渡戸が公の場でクエーカーであることを表明したのは、これが最初ではなかったかと推測している。この講演をいち早く出版したのは、クエーカー事務局（Friends Service Council）だったことも付記されている。

周知のように、新渡戸の連盟での業績の一つに、国際知的協力委員会がある。一九二二年に十二人の学者で構成された国際知的協力委員会が発足すると、新渡戸はそのまとめ役を任された。その一人アインシュタインが、ベルリンの反ユダヤ人感情の高まりから、国際組織に名を連ねることに危険を感じて、委員会からの辞意を申し出ると、新渡戸は何とか思いとどまらせようと奔走した。その経緯は、ロナルド・クラークが書いたアインシュタインの伝記[4]に記されているが、その伝記の中で、新渡戸は、「日本のサムライ階級の家に生まれ、哲学的遍歴を経て、クエーカーに

伍した人」と紹介されている。

新渡戸が連盟事務局の次長に任命された経緯には神がかり的なものが感じられる。台湾勤務時代の上司後藤新平は、その後、満鉄初代総裁、逓信大臣、内務大臣、外務大臣を歴任していたが、大正七年（一九一八年）の原敬内閣から外れ、自由な時間をもてるようになり、折しも、第一次世界大戦が終結し、パリで平和会議が開かれるというときでもあり、ひとつ戦後のヨーロッパを見てこようと考え、ついては外国通の新渡戸稲造を伴っていきたいと考えた。この誘いを受けた新渡戸は大学に長期の休暇を願い出て――長期といってもせいぜい数ヶ月、それが六年以上になるとは予想できないことだった――メアリーや鶴見祐輔等の門下生も連れて外遊の旅に出た（一九一九年三月）。すぐにパリには行かない。まずアメリカ各地を四月、五月と二ヶ月かけてまわり、さらにロンドンに一ヶ月（バッキンガム宮殿で英国王に謁見したりして）、パリには七月初めに到着した。このとき、パリの平和会議で日本の全権大使となっていたのは、かつて新渡戸を一高校長に推挙した牧野伸顕であった。これからの日本人を教育するのは新渡戸のような国際人こそふさわしいと考えて推挙したのであった。

日本は大戦後、戦勝五大国の一員であった。というか、日本政府は威信にかけてその地位を確保しようと必死になっていた。戦勝国の一員とはいえ、アジアの国であり（第一次大戦はヨーロッパの戦争だった）、戦争への貢献は経済的援助が主で、人的被害はほとんどこうむっていなかったので、五大国が集まっても、かやの外におかれがちだった。米国大統領ウッドロー・ウィルソンの提案になる国際連盟の事務局総長に、英国人ドラモンド卿が任命され、その下に三ないし四の次長席がもうけられることになると、この次長席のひとつを日本人にまわしてもらいたいと、必死の駆け引きが行われ、何とかそれが実現しそうになっていた。この次長席を確実にするためには、何としても国際社会が納得する人を推挙しなくてはならない。そう考えて極秘に人選をすすめていた。そこへ後藤新平と新渡戸の一行がパリに到着した。「この人しかいない」と牧野伸顕が考えたことは想像に難くない。

新渡戸自身は七月の半ばにはロンドンにもどっていた。そして正式の任命が、パリからもどった駐英大使珍田捨巳から後藤へ、そして後藤から新渡戸に伝えられた。この知らせを受けたとき、新渡戸は、同じクエーカーの友人アンナ・チェイスに「頭上に私を導く御手のあるのをあらためて感じます」と書き送っている。[5] 新渡戸は、クエーカー教徒として連盟の仕事に全身全霊を傾けたのだと言っても過言ではない。このようなクエーカーとしての側面は、日本ではこれまで強調されることが少なかったように思われる。

## (二) クエーカーとの出会い

ジュネーブでの退任記念講演の中で、新渡戸は、過去四〇年間、自分はクエーカー教徒として生きてきたと述べている。ちょうど四〇年前の一八八六年は、新渡戸がフィラデルフィア友会と強い絆をつくった年である。確証はないが、自費留学のため極度に困窮していた新渡戸に、フィラデルフィア友会が援助の手をさしのべたと思われる。やがてメアリーとも知り合う。もちろん新渡戸はその前からクエーカーのことは知っていた。札幌農学校の学生時代に、精神的危機を救ってくれた愛読書カーライルの『衣装哲学』の中に、クエーカー賛美が出てくる。しかしカーライルの記述は独特の言い回しのために、それだけではクエーカーの具体的な姿は伝わってこない。カーライルは、自らが愛憎相半ばする複雑な感情を抱いていた(それはしばしば強い影響を受けたことの兆候でもある)フランスの文人ボルテールに依拠していたに違いない。十八世紀前半、アンシャン・レジーム下のフランスを追われてイギリスにやってきたヴォルテールの目に、立憲君主制をはじめとして自由の空気が充ち満ちたイギリスは、まばゆく映った。その印象をまとめたのが『イギリス国民についての哲学的書簡』[6]である。全二四の書簡からなるこの書簡集の第一信から第四信までをクエーカー賛美に当てている。これはクエーカー賛美の最初のものだったと言ってよい。ボルテール独特のユーモアによって語られているが、まぎれもなく、これこそ真の愛の宗教と言えるものだという賞賛が、ことばの端々か

ら伝わってくる。

以下ボルテールの記述に従ってクエーカーの歴史を概観すると、十七世紀中葉、ピューリタン革命のさなかに、靴屋をしていたジョージ・フォックスという人が、ある日突然、教会の牧師の偽善的な態度に気づいて、教会や牧師の助けなしにじかに神と向き合う信仰を考え出した。人は神の前に平等であり同胞であるから、身分の上下や人種で態度を変えることはできない。当時目上の人の前では帽子を取るのが礼儀だったが、治安判事の前でも、ほかの人に会ったときと同じように、帽子を取ったりしない。無礼だといって役人がほおをなぐると、もう一方のほおをだして、こちらもお願いと言う。裁判で「ほんとうのことを証言すると誓え」と言われると、聖書に「誓ってはならない」と書いてあると答える。態度が反抗的であるとしてむち打ちの刑になる。ぶたれるたびに恍惚とした表情になり、もっと強くやってくれと言う。言われるまでもないと、さらに力を加える刑吏も、やがて不思議に思い、一体どんな宗教なのだと問う。フォックスが説明しているうちに刑吏はすっかり感化されてしまう。獄吏も囚人もみな感化される。牢にいれておくとやっかいだと、釈放されると、今度は兵士たちの中に入っていって、道を説く。聖書は人を殺してはならないと教えている。自衛のためでも武器を取ってはならないというのがクエーカーの考えで、フォックスのことばに感動した兵士たちはつぎつぎに部隊を去ってしまう。議会軍を率いるオリバー・クロムウェルは、このフォックスにほとほと手をやいたと言われる。

ペンシルバニアの開祖であるウィリアム・ペンはフォックスよりひと世代あとの人で、フォックスの後継者である。身分はフォックスとは反対で、国王側近の貴族。父親がどんなに懇願してもやめるどころか、逆に、父親にクエーカーになるように勧める。父親の遺産で国王から新大陸の土地を買い取り、ペンシルバニア（「ペンの森」という意味）の開拓事業に着手するが、原住民を人間扱いしなかったそれまでの入植者と全く異なり、同等の権利を持った対等の交渉相手と見なし、原住民を感服させ、クエーカーに入信する原住民も多かった。宗教や生まれや人種の差別を

しないこと、徹底した平和主義、その二つに共鳴して多くの人がヨーロッパ各地から入植して繁栄し、独立戦争時には十三の植民地の中心になっていた。首都フィラデルフィアはギリシャ語で「兄弟愛」という意味である。

新渡戸がボルテールの『哲学的書簡』を読んでいたことは、ジュネーブでの退任記念講演の中で言及していることから明らかであるが、いつ頃読んだものか定かではない。またウィリアム・ペンの植民政策について詳しい知識を身につけたのがいつのことだったかも特定できない。アメリカに渡る前から、こういったことのすべてを知っていたかもしれない。しかし百聞は一見にしかず、見ると聞くでは大違いだったに違いない。フィラデルフィアで、様々な慈善的社会事業に献身する人たちの姿を見、そういう人たちと語る中で、新渡戸の人生観は確立していった。当時フィラデルフィアのクエーカーの婦人部会では、遠い国日本に女性のための教育機関をつくりたいという提案が出され、議論の的になっていて、新渡戸は日本の教育の現状についての講演を頼まれたりした。そのような講演の折に、生涯の伴侶となるメアリー・エルキントンに出会った。メアリーもクエーカーの家庭に育ち、父親も弟も慈善事業に専念していた。

米国滞在が三年経過したとき、新渡戸は経済的窮乏からようやく解放された。「札幌農学校の助教に任用する、ついては三年間ドイツに留学して農学の研究をするように」という任命書が届いたのである。フィラデルフィアを離れたドイツでの三年間に、新渡戸の人生設計が固まっていく。メアリーと結婚したい。そして札幌で、貧しい入植者たちの子女に教育の恩恵を与えたい。メアリーへの愛とクエーカーとしての情熱はひとつのものだったに違いない。新渡戸とともに遠い異国の地、日本に行こうと決心したメアリーも同じ思いであった。平坦な道ではない。しかしそれが神の心にかなうのだ、と。

三年間のドイツ留学を終えてフィラデルフィアに戻った新渡戸は、メアリーと結婚し、メアリーを伴い、明治二四年（一八九一年）二月、札幌農学校教授として着任した。いくつもの科目を担当し、大車輪の活躍であった。また、

つらいことも起きた。ふたりの間にできた長男は生後一週間で亡くなり、産後の経過が悪かったメアリーは子供を産めない体になった。そしてこの深い悲しみの中から、慈愛に満ちた教育者が生まれたのである。

### (三) 遠友夜学校の名前の由来

遠友夜学校は、メアリーの父親の世話になったある女性が残した遺産によって可能になった。しかしその着想は、それ以前、新渡戸がドイツで、メアリーと結婚して札幌に赴くという人生設計を描いていた頃に始まっている。ドイツから宮部金吾に当てた書簡に「ぼろ学校」(ragged school) という名前で何度か出てくる。また、その女性の遺産だけで実現できるものではなかった。敷地も広げたい。手伝ってくれる農学校の学生に謝礼もあげたい。二人の夢であった遠友夜学校は、フィラデルフィアの義弟をはじめ、多くのクエーカーの人たちの金銭的援助がなければ実現しなかったのである。このことは、新渡戸が義弟やその他クエーカーの知人にあてて書いた手紙の中に読み取ることができる。ところで、校名の由来は、論語の「友あり、遠方より来たる。また楽しからずや」であると説明されることがあるが、少し首肯しがたい点があるので、以下この校名の由来を考え、新渡戸とクエーカーについての本稿の考察を終えたい。

結論から言うと、新渡戸には、一にも二にもクエーカーへの思い入れがあったということ。新渡戸家に伝わる伝説として、「遠」は生後まもなくなくなった子の名前「遠益」からとったものだと新渡戸がメアリーに話したという加藤武子氏の説明がある。しかしこの場合、トーマスというクリスチャンネームに当てる漢字として、なぜ「遠」が使われたのかという疑問が残る。私には、これはフィラデルフィアを遠く離れた日本をさすように思われてならない。新渡戸は、メアリーを伴って札幌に着任したとき、メアリーの立場に立って、自分たちのことを遠い国、日本に赴いたクエーカーと位置づけていたに違いない。日本における国際結婚のはしりとも言える二人の結婚生活において、新

渡戸の流儀は、メアリーの立場に立つというものであった。たとえば、新渡戸の住まいは常に洋風であった。和洋折衷の小日向台の新渡戸邸も、使用人や書生の部屋をのぞけば全て洋室であった。[7] ジュネーブではもちろん洋風ずくめであった。ときどき日本食の店で羽目を外してご飯を大量に食べたという滑稽な話が伝えられているが、[8] それはとりもなおさず、メアリーと一緒の時は日本人としての自分を極力抑えていたことを意味する。従って二人に子供ができたとき、メアリーの立場に立って、「遠」い国、日本を「益」する人物になってほしいという願いを、この漢字に込めたのだと考えられる。

「友」については、これこそ本稿で強調してきたことである。クエーカーというのは、もともと外部の人がからかい半分につけた名前であり、クエーカーの人たちはお互いを「友」と呼びあい、自分たちの集まりを友会（society of friends）と呼ぶ。新渡戸がクエーカーの知人に送った手紙はいつも“Thy Friend, Inazo Nitobe”と結ばれている。新渡戸には、「遠」いフィラデルフィアの「友」たちの援助で実現した学校という思いが強かったと思われる。しかしクエーカーは生き方を実践するだけで、布教や宣伝を行ったりしない。そのために新渡戸は校名の由来を周囲の人に説明することはなかったのだと推測できる。星ハナオという看護婦や、菅原という公務員の妻でクリスチャンであった婦人が、入植者の家をまわって生徒を勧誘したのであるが、彼女たちが宗教のことは一切語らないようにしたことを、新渡戸は賢明なやり方だと言っている。[9] 高倉新一郎氏によると、学校の名前は論語から来ているのですかと友人からたずねられ、そうだと新渡戸は答えたとのことである。もちろんそれも悪くない。校名は、いろんな連想が浮かべば浮かぶほどよい。実際「遠友」は本当に響きのよい、含蓄のある名前ではないだろうか。ただ、新渡戸の心の中では、基督友会への思いが中心にあったのではないかというのが、私の推測である。

## 注

（1）『新渡戸稲造全集』第十五巻、三三二－三五一頁所収。
（2）『新渡戸稲造全集』第四巻、四〇八－四〇九頁。
（3）ロンドン・クエーカー図書館所蔵 *The Friend* バックナンバー保存版参照。
（4）Ronald Clark, *Einstein: The Life and Time* (New York: Avon Books, 1971), p.432.
（5）ジョージ・オーシロ『新渡戸稲造――国際主義の開拓者』（中央大学出版部、一九九二年）一七三頁。
（6）電子テキスト（http://www.bartleby.com/34/2/1.html）参照。
（7）ジョージ・オーシロ『新渡戸稲造――国際主義の開拓者』一〇八頁。
（8）ジョージ・オーシロ『新渡戸稲造――国際主義の開拓者』一九三頁。
（9）『新渡戸稲造全集』第二三巻、五九〇－五九一頁。